

詣が深く、昭和七年には教育上に利用したセメント工芸の研究に對して山梨から賞金を授与され、各地でセメント講習会を指導し、全国セメント作品展審査員などもつとめた。『帝國工芸』（第九卷第二号、昭和十年二月）にはその功績が次のように紹介されている。

セメントの工藝的利用 山梨縣立師範學校教諭矢崎好幸氏（本會會員）は大正十二年の關東大震災の復興に際し夥しきセメントが需用された有様を見て、土木や建築のみでなく、更らにその効用範圍を擴大して工藝方面にも利用せんと考を起し爾來十餘年に亘つて苦心研究を續け、最近に至り漸く加工混合劑、着色材、セメント工作新技法等を發見してセメント工藝の一般化を基礎づけた。この新技法によれば、混合劑の多少によつてセメントは柔硬を自由に調節され宛も鉛細工の様に扱ふことが出来るばかりでなく、從來全く不可能とされてゐた硝子とセメントの密着も出来る。且つ着色も自由となつたため、思ひ通りの型思ひ通りの色の工藝品を生み出すことが出来、しかもセメント特有の堅牢さと、独自の美術的風格を有し、その製品は彫刻家方面からも推賞されてゐる。さればその利用範圍は頗る廣く、試作品に付てその一斑を擧げれば、空瓶にセメントで裝飾を施した花瓶、電気スタンド、玩具、文鎮、柱掛等をはじめ大理石、タイルの代用品として建築にも利用され、粘土、石膏と並んでその工藝化が期待されるに至つた。

臨時セメント美術教室の授業は毎週木、金曜日の第五、六、七時

限に限り、臨時セメント美術教室（図画師範科の向つて右隣り）で行われることになった。授業開始は昭和十五年一月二十五日で、兼修志望者は彫刻科と工芸科の生徒がその大半を占め、当初は三年生二十三名、四年生三名が兼習した。なお、同教室は昭和十九年の本校改革の際に廃止され、その時矢崎も森田も退職した。

⑰ 渡辺素舟の中国旅行

図案家渡辺素舟（本名清重郎）は明治二十三年十一月十六日に生まれ、愛知県立第一中学校、明治大学高等予備學校を経て大正五年に東洋大学専門部を卒業。それと同時に『図案工芸』の編集に従事し、裝飾美術家協会々員（大正八年）、工芸通信社同人（同十一年）、工芸家聯盟同人（同十二年）、可志和会同人（同年）、无型同人（同十五年）として図案の研究を続け、日本工芸美術会第一回展覽會審査員（同十五年）、七人社顧問（昭和七年）、帝國工芸會顧問（同三年）、東京高等工芸學校囑託（同年）、商業美術家協會顧問（同三年）、美術評論家協會會員（同四年）、帝國美術學校講師（同六年）、白木屋美術部顧問（同七年）、多摩帝國美術學校教授（同十年）、『工芸美術』編輯（同十一年）、日本図案家聯盟常務理事（同年）、日本漆芸院贊助員となった。大正、昭和期の工芸図案界の代表者の一人で、著書も多く、本学所蔵自筆履歷書には昭和十三年十二月現在までの編者が次のように記されている。

一 図案工藝年鑑

大正十五年度

図案工藝社刊

一 窓飾標準図案集

昭和二年四月

平安堂刊

- 一 現代日本の工藝美術 昭和二年八月 図案工藝社刊
- 一 支那陶磁器史 昭和四年十月 中央出版社刊
- 一 図案法研究 新図画講座十二冊 昭和四年六月—五年七月 美術研究社刊
- 一 日本美術年鑑工藝之部 自一九二八年 東京朝日新聞社刊
至一九三二年
- 一 現代商業美術全集二四卷 編集同人 昭和三年六月
同 五年六月 アルス刊
- 一 日本金工史 香取秀真氏共著 新潮社刊
美術百科全書
- 一 美術百科全書東洋篇〔中略〕 新潮社刊〔未刊〕
- 一 図案の美学 昭和七年十月 アトリエ社刊
- 一 図案資料大成 十二卷 自昭和七年三月 杉浦非水氏共編
至同八年三月 アトリエ社刊
- 一 日本工藝史上代篇 昭和十三年四月 厚生閣刊
- 一 支那工藝史上古篇 昭和十四年一月 印刷中 東亜書院刊

素舟は本校の教育に直接関与することはなかったが、工芸や図案の教官たちとは深い関係があった。

昭和十三年十二月、素舟は「満洲帝国をも含んで今日の北支及び中支の臨時、維新兩政府下に於ける生活の實際を構成する工藝とその國民的趣味を構成する図案の調査」をし、「新秩序建設」に貢献したいので、配慮を得たいという申請書に和田三造の推薦書を添えて本校校長に提出した。これに対して本校は、十四年一月二十五日、「中華民國視察旅行ノ序ヲ以テ本校教授上参考資料トナルベキ美術工藝ニ関スル調査ヲ囑託ス」という辞令を送付した。